

<N1 s'y connaître en N2> の用法*

曾我祐典

0. はじめに

「人がなにかに精通していること」という事態にフランス語で言及するとき、発話者はしばしば動詞 *connaître* を含む次のような発話を構成する。

(01) Il (ne) connaît (pas) la musique contemporaine/ce domaine.

また、ときには次のような発話を構成することもある。

(02) Il (ne) s'y connaît (pas) en musique contemporaine/en ce domaine.

すなわち、「～に精通している」ということを <N1 connaître N2> ではなく <N1 s'y connaître en N2> で表わすこともあるわけだが、発話者がやや複雑な構造をもつこの表現の方を選択するのはどのような場合だろうか⁽¹⁾。本稿ではそれを明らかにしたい。

以下では、まず、考察の範囲を統語的な観点から明確にする(1)。そして、<N1 s'y connaître en N2> について、「精通」の対象がどのようなものである場合に用いるかをインフォーマント⁽²⁾の面接調査の結果にもとづいて検討し(2)、「精通」のしかたがどのようなものである場合に用いるかを考える(3)。

1. 隣接表現

われわれが用法を解明しようとするのは、<N1 s'y connaître en N2> (<N1 s'y connaître> と <en N2> のあいだに休止なし) についてである。以下に見る

ように隣接するさまざまな表現があるが、それらは、<N₁ connaître N₂> (<N₁ connaître> と N₂ のあいだに休止なし) の対比項と見なすには問題があるので、考察範囲から除くことにする。

1. 1 <N₁ s'y connaître>

発話者は、何についての「精通」を問題にするかが発話場面や文脈から明らかの場合などには、N₂ や <prép. N₂> を伴わない <N₁ s'y connaître> のみの発話を構成することがあるが、これは考察範囲に含めない。

また、発話者は、<N₁ s'y connaître> に休止つきで <prép. N₂> をつづける <N₁ s'y connaître, prép. N₂> の表現も用いる (Il s'y connaît, à la musique contemporaine/dans ce domaine/en musique contemporaine.) が、これも考察範囲に含めない。

さらに、<N₂/prép. N₂> に休止つきで <N₁ s'y connaître> をつづける <N₂/prép. N₂, N₁ s'y connaître> の表現も用いる (La musique contemporaine/A la musique contemporaine/Dans ce domaine/En musique contemporaine, il s'y connaît.) が、これも考察範囲に含めない。

1. 2 en 以外の前置詞を含む <N₁ s'y connaître prép. N₂>

<N₁ s'y connaître prép. N₂> の構造の表現 (<N₁ s'y connaître> と <prép. N₂> のあいだに休止なし) に使うことが考えられる前置詞は、en 以外には à と dans であろう。しかし、前置詞 à を含む <N₁ s'y connaître à N₂> は、現代フランス語では、N₂ が (tout) ça または (tout) cela の場合 (Il s'y connaît à (tout) ça/à (tout) cela.) を除いて、ほとんど用いないようである⁹⁾。実際、インフォーマントは、次のような発話を容認しない。

(03) *Il s'y connaît à la musique contemporaine.

また、前置詞 dans を含む <N₁ s'y connaître dans N₂> は、「領域・分野」の意味の branche, domaine, secteur などの場合 (Il s'y connaît dans cet-

te branche/dans ce domaine/dans ce secteur. Il s'y connaît dans le domaine de la musique contemporaine.)に限られるようであるから、考察範囲に含めない。

1. 3 <N₁ y connaître Y (à N₂/en N₂)>, <N₂, ça le connaît>

発話者は、<N₁ y connaître Y (à N₂/en N₂)> や <(N₂), N₁ y connaît Y> のような表現を用いることがある (Il n'y connaît rien (à la musique contemporaine/en musique contemporaine). (La musique contemporaine,) il n'y connaît pas grand-chose.) が、それは Y として grand-chose, que dalle, rien などごく限られた語句を含む発話で、否定の文脈の場合が多いようだ⁽⁴⁾。それらは考察範囲から除く。

また、発話者は <N₂, ça le connaît> のような表現を用いることもある (La mécanique, ça me connaît.) が、非常にくだけた言葉づかいの口頭表現に限られる。これも考察対象に含めない。

2. 「精通」の対象

多岐にわたる「精通」の対象について <N₁ connaître N₂> を用いることは、RÉMI-GIRAUD, S.(1986), TAMBA-MECZ, I. et al.(1988), FRANCKEL, J.-J. et al.(1990) などの記述からも分かる。これに対して、限られた対象を話題にするときにしか <N₁ s'y connaître en N₂> は用いないようである。それがどのようなものであるか、すなわち、<en N₂> に現れるのがどのような名詞グループであるか検討しよう。

2. 1 個々のものは不可

<N₁ s'y connaître en N₂> が空間関係をマークしうる前置詞 en を含んでいるからといって、「精通」の対象が個々の土地・物理的空間である場合にこ

の表現を用いることはない。たとえば、国名や個別の「国・地域・町・界限」を表わす N₂ を含む次のような発話は容認されない (<N₁ connaître N₂> を用いる Il connaît la France/ce pays/cette région/cette ville/ce quartier. や Il connaît son pays natal/sa ville natale. は容認される)⁽⁵⁾。

(04) *Il s'y connaît en France/en ce pays/en cette région/en cette ville/en ce quartier.

(05) *Il s'y connaît en son pays natal/en sa ville natale.

土地・物理的空間に限らず、一般に、「精通」の対象が個々のものであるときに <N₁ s'y connaître en N₂> を用いることはない。たとえば、「それらの骨董家具に精通している」や「自分の職業に精通している」を表わすときに次のような発話を構成することはない (<N₁ connaître N₂> を用いる Il connaît ces meubles anciens /son métier. は容認される)。

(06) *Il s'y connaît en ces meubles anciens/en son métier.

ただし、「精通」の対象が「こ(そ)の領域・分野」といったものである場合は、インフォーマントは次のような発話を容認する。

(07) Il s'y connaît en cette branche/en ce domaine/en la matière/en ce secteur.

名詞限定語を含む <en N₂> を用いるのは、われわれのこれまでの調査では、(07) のように「領域・分野」を話題にする場合に限るようである。したがって、以下では名詞限定語を含まない <en N₂> の場合に限って検討することしよう。

2. 2 具体性のある程度以上そなえているもの

<en N₂> に非常に抽象的で漠然としたもの、すなわち具体性が非常に低いものを表わす名詞が現れる (08) のような発話については、容認するのをためらうインフォーマントがいる。

(08) ?Il s'y connaît en art/en musique/en archéologie.

これは、具体性が非常に低いものを話題にすることが、くだけた言葉づかいの日常的な口頭表現の場面にほぼ限られる⁶⁾<N1 s'y connaître en N2>の使用と調和しないと感じられるためかもしれない。しかし、根本的な理由は、具体性が非常に低いものが次の2. 3で述べるような技術領域・活動分野にとらえにくいことに求められるであろう。実際、(08)を容認しないインフォーマントも、(09)-(11)のように名詞に適当な修飾語を添えて N2 が表わすものの具体性を高めて(広がり限定して)より明確な輪郭をもつ領域・分野にすると、発話を容認するようになるのである。

- (09) Il s'y connaît en art italien.
- (10) Il s'y connaît en musique classique, en jazz et en musique contemporaine. Tu peux lui faire confiance.
- (11) C'est un archéologue remarquable et il s'y connaît particulièrement bien en archéologie coréenne.

2. 3 技術領域・活動分野

われわれの観察では、「精通」の対象はなんらかの意味で技術領域・活動分野と呼べるようなものであることが多い。これに関して、PICOCHÉ, J. (1993)は“Un être humain *connaît* une langue, une technique”の項目に次のように記している(p. 163) :

(...) dans le cas du nom d'une technique, on emploie plutôt la locution *s'y connaître* qui signifie “en avoir une bonne expérience”. Ex. *Sylvie s'y connaît en pâtisserie* : elle a une grande habitude de cette technique, elle y réussit très bien (...)

pâtisserie 以外の技術領域・活動分野の例をいくつか示しておこう⁷⁾。

- (12) Il s'y connaît en comptabilité/en cuisine/en économie/en mécanique/en photo/en politique.
- (13) Il ne s'y connaît pas en électronique/en maquillage.

文体レベルに関しては、これらの名詞が表わすものが、上の (08) の *art, musique, archéologie* が表わすものに比べて実用的・実践的性格が強く、日常的な口頭表現の場面で話題になりやすいということは言えるだろう^⑧。

ここで興味深いのは言語名である。6人のインフォーマントのうち2人は (14) を容認せず、1人は (15) を容認しない (<N₁ connaître N₂> の発話は問題なく容認する)。

(14) ?Il s'y connaît en français.

(15) (?) Il s'y connaît en français de la banlieue.

これらを容認しないインフォーマントがいるのは、彼らにとって、(12), (13) の名詞が表わすものとちがって、*français* や *français de la banlieue* が表わすものが抽象的で茫漠としたものとも感じられ、必ずしもひとつの技術領域・活動分野としてとらえやすすくない面をもっていることによると考えられる。(14) を容認せず (15) を容認するインフォーマントにとっては、*de la banlieue* という修飾語付きの *français de la banlieue* なら *français* が表わすものの範囲がそれだけはっきり限定されて、ひとつの技術領域・活動分野としてとらえやすくなっているのであろう。

2. 4 具象物の集合

インフォーマントによれば、「ピアノ音楽に精通している」を表わすとき、適切な先行文脈が無い場合、<N₁ s'y connaître en piano> を含む次のような発話を構成することはない (<N₁ connaître le piano> を含む発話を構成することはある)。

(16) *Il s'y connaît en piano.

(16') Il s'y connaît en musique de piano.

これは、名詞 *piano* が「ピアノ音楽」よりもむしろ「(楽器としての) ピアノ」を表わすことが多いことからくる制約だと考えられる。

(16) は口頭表現の場面では、ふつう「(楽器としての) ピアノに精通して

いる」の意の「Il s'y connaît en pianos.」(pianos は複数形)と聞き取られてしまう。その場合、ピアノの集合またはピアノというものが形成する領域を pianos (複数形)で表わしているわけである。また、楽器としてのピアノを問題にして「古いピアノに精通している」を表わすとき、次の発話は適切と判定される。

(17) Il s'y connaît en vieux pianos.

この場合、古いピアノの集合または古いピアノが形成する領域を vieux pianos (複数形)で表わしているわけである。

同様に、パリのナイトクラブの集合、競走馬の集合、アフリカ言語の集合といったものについての「精通」を話題にする場面を想定すると、インフォーマントは次のような発話を適切と判定する。

(18) Il s'y connaît en boîtes de nuit parisiennes/en chevaux (de course)/
en langues africaines.

他の集合の例をいくつか示しておこう⁷⁾。

(19) Il s'y connaît en baisers à la française/en hommes/en kimonos/en
officiers supérieurs/en signes (du zodiaque)/en sentiments.

(20) Il ne s'y connaît pas en micro-ordinateurs/en magazines féminins/
en plantes médicinales.

一般に、「精通」の対象が、上の (04)-(06) で見たような個々の具象物ではなく、ひとまとまりの集合・領域ととらえる複数の具象物であるとき、<N₁ s'y connaître en N₂> を用いungると言えそうである。

興味深いことに、(18) の <en boîtes de nuit parisiennes> を <en boîtes de nuit à Paris/de Paris> のように変えると、インフォーマントによっては容認しなくなる (<en librairies anglophones parisiennes/à Paris/de Paris> や <en quartiers chauds parisiens/à Paris/de Paris> などについても同様)。これは、語数の多い N₂ が <N prép. N> の構造をもつと、ひとまとまりの集合・領域としてイメージしにくくなるためではないかと考えられる。

3. 「精通」のしかた

上で「精通」対象がどのようなものであるかを検討したわけだが、同じ「精通」のしかたに <N1 connaître N2> と <N1 s'y connaître en N2> が対応するわけではないようだ。どのような「精通」のしかたの場合に発話者が <N1 s'y connaître en N2> を用いるかを考えることにしよう。

3. 1 精通主体：対象の内部

「人がなにかに精通していること」という事態だが、よく見られるのは、人が対象になんらかの形で近づくなり接触するなりして、「見知っている、なじんでいる」という段階に達する場合である。精通主体は対象を外からとらえていってよいだろう。このような事態の概念構造には <N1 connaître N2> の統語構造がうまく対応している。

これに対して、ときには、人がある領域・分野に入っていく、そこにおいて「ものごとがよく分かっている、詳しい、技能がある、熟達している」という段階に達することもある。精通主体は対象を内からとらえていってよいだろう。このような事態に日常的な口頭表現の場面で言及するとき、代名動詞 *se connaître* としばしば空間的概念を表わす語句 *y, en* を含む <N1 s'y connaître en N2> を用いることができる⁹⁾。それは、この表現が「N1 がスペース N2 において自分自身を知っている（自分がしていることが分かっている）こと」という概念構造に対応する統語構造をもっているからだと考えられる。このことはこの表現が <N1 se connaître> と <en N2> の組み合わせに由来するという歴史的な成立過程からも裏づけられる。たとえば、*Dictionnaire historique de la langue française* (Robert, 1992) によれば、すでに 13 世紀には “être compétent en N2” の意味で <N1 se connaître à N2/en N2> が用いられていた。この <à N2/en N2> を *y* で受ければ <N1 s'y connaître> と

なるが、この表現における y は働きが次第に弱まって、20 世紀初頭には <N₁ s'y connaître en N₂> においても過剰な要素とは感じられなくなったようだ。実際、現代フランス語に関して、*Le Grand Robert* は次のように記している：

Cette locution verbale [=s'y connaître], qui vient de *se connaître à* (qqch.), est devenue un verbe où la particule y n'est plus analysable (on peut en effet le construire avec *en* : *s'y connaître en peinture*).

また、HANSE, J.(1983) も次のように記している(p.263)：

On ne sent plus et on admet le pléonasme dans “s'y connaître en”.

3. 2 「精通」のしかたと対象

上で見たように、<N₁ s'y connaître en N₂> という表現は「N₁ がスペース N₂ において自分自身を知っている」を原義とする一種の空間的メタファーと見なせるわけだが、ここではそのことを踏まえて、上の2で検討した「精通」の対象を見直してみよう。

2. 1では、対象が個々の土地・物理的空間や個々の事物の場合には <N₁ s'y connaître en N₂> を用いることがなく、「こ(そ)の領域・分野」といったスペースの場合には用いることを見た。それは、一つにはこの表現がもつばらメタファーとして機能するものであることによると考えられる。しかし、根本的には、人は土地・物理的空間や個々の事物を「(特定の技術領域・活動分野において)ものごとがよく分かっている、詳しい、技能がある、熟達している」といった意味の「精通」の対象とはしないということによって説明されるであろう。

2. 2では、対象が非常に抽象的で漠然としたものである場合に <N₁ s'y connaître en N₂> の使用をためらうフランス語話者がいることを指摘した。そして、そのことを、この表現が日常的な口頭表現の場面に結びついているという文体的要因によって説明する可能性を示唆した。しかし、N₂ を一つのスペースとして喚起するメタファーとして機能するためには、つまり、N₂ が技

術領域・活動分野ととらえられるためには、当然、「スペース N2」が具体性のある程度以上そなえ、明確な輪郭をもっていなければならないという事情があると考えられる。

2. 3では、対象がなんらかの意味で技術領域・活動分野と呼べるようなものである場合に <N1 s'y connaître en N2> (N2 は領域・分野を表わす名詞単数形) を用いることを見た。これがこのメタファーを用いる典型的な場合であろう。

2. 4では、対象が具象物の集合の場合にも <N1 s'y connaître en N2> (N2 の名詞は複数形) を用いることを指摘した。この場合も、発話者はそれら具象物の集合をやはりなんらかの意味でひとつの技術領域・活動分野ととらえている。つまり、「対象がなんらかの意味で技術領域・活動分野と呼べるようなものである場合」のヴァリエーションと見なすことができ、このメタファーを用いることが自然な行為となるのである。

4. おわりに

「人がなにかに精通していること」という事態にもいろいろあるが、多岐にわたる対象に近づくに接触するなりして外からとらえる場合はしばしば <N1 connaître N2> を用いる（この表現は、くだけた言葉づかいの場面からあらたまった言葉づかいの場面まで幅広く用いる）。

これとはちがって、主体 N1 が「スペース N2」の内部に身をおいて、そこで自然にのびのびと振る舞う、対象 N2 をそれだけしっかり自分のものになっているというような場合は <N1 s'y connaître en N2> を用いる（くだけた言葉づかいの場面に限る）。すなわち、<N1 s'y connaître en N2> を用いるときは、主体 N1 が「精通する」という事行にコミットする度合いが高いと言えるだろう。これには、en が二つのものが一体となる関係の表示に適していることも関わっている。そして、何よりも、<se 動詞> が *implication forte*

を表わす形式であることが作用している⁽¹⁰⁾。

bien, un peu その他の程度副詞の使用に関する <N1 connaître N2> との対比も、1で概観したような隣接表現との比較対照も、本稿では行なう余裕がなかった。稿をあらためて論じることにはしたい。

* フランス語学のメーリングリスト Frenchling の討論がこのノートを書くきっかけとなった。また、西村牧夫氏(西南学院大学)、Olivier Birmann 氏(関西学院大学)との議論は非常に有益であった。Frenchling の討論参加者と両氏に感謝の意を表わしたい。

注

1. 発話者はこれらの表現にしばしば bien, un peu のような程度の副詞を添えるが、これについては論じない。
2. インフォーマントは高学歴のフランス人6人。
3. ただし、HANSE, J.(1983) には “à cela vieillit” とある。また、*Grand Larousse Encyclopédique* (1960-64) は <N1 s'y connaître à N2> について “vieilli” と記している。
4. 西村牧夫氏の指摘 (F-ling 1803, 1997.07.08)。ただし、肯定の文脈の次の発話をインフォーマントはほぼ容認する：(?)[Jean-Marc a longtemps vécu à Las Vegas.] Les boîtes de nuit américaines, il y connaît quelque chose. (“il en connaît quelque chose” は問題なく容認する)
5. (04), (05) は en を dans に変えても容認されない。
6. DUPRÉ, P. (1972) は “(...) Elle [La forme s'y connaître en] garde un ton légèrement familier” と記している(p.508)。あらたまった言葉づかいの場面にはほぼ限られる <en 指示形容詞 N> を含んでいる上の (07)も en を dans に変えて Il s'y connaît dans cette branche/dans ce domaine/

dans ce secteur. とするとより自然な発話になるようだ。また、一般に、
<N₁ s'y connaître en N₂> の発話にくださった言葉づかいの場面で多用する
drôlement や vachement を添えると容認度が高まり、反対に、あ
らたまった表現である fort bien を添えると容認度が下がるという事実
もある。

7. Frenchling での討論の際に西村牧夫氏が提供したデータ ([F-ling 1803], 1997.07.08) も参考にした。
8. もちろん、これらの名詞の中には多義的なものもあるので問題は単純ではない。たとえば mécanique は、たしかに自動車修理を話題にするときは (12) のように <N₁ s'y connaître en N₂> の発話で用いることが多いが、力学・機械工学を話題にするときはむしろ <N₁ connaître N₂> の発話で用いることが多いといったぐあいである。
9. あらたまった言葉づかいの場面で言及するときは、<N₁ être compétent/expert/fort/habile en N₂>, <N₁ avoir de la compétence en N₂> などを用いる。
10. このことは、ある動詞とそれに se を加えた代名動詞が類義語のペアを形成する場合 (ex. approcher, s'approcher) について広くあてはまると思われる。

引用文献

- DUPRÉ, P. (1972) : *Encyclopédie du bon français dans l'usage contemporain*, Editions de Trévise.
- FRANCKEL, J.-J. et al. (1990) : *Les figures du sujet, A propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys.
- HANSE, J. (1983) : *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*, Duculot.
- PICOCHÉ, J. (1993) : *Didactique du vocabulaire français*, Nathan.

- RÉMI-GIRAUD, S. (1986) : “Etude comparée du fonctionnement syntaxique et sémantique des verbes *savoir* et *connaître*”, *Sur le verbe*, P. U. de Lyon, pp.169-306.
- TAMBA-MECZ, I. et al. (1988) : “Analyse de deux paires synonymiques en français et en japonais : *connaître/savoir* - *shiru/wakaru*”, *Linguistique japonaise*, Univ. de Paris VII, pp.7-41.

(文学部教授)